

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## 接続詞の周辺：同帰に属する語の文法的性格

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-02-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, 明, NAKAMURA, Akira メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00001763">https://doi.org/10.15084/00001763</a>

# 接続詞の周辺

——同帰に属する語の文法的性格——

中 村 明

## 目 的

これまでの接続詞研究は、語の意味を単位にそっくりどれかに所属させることを前提としていかにみごとに分類するかを中心に進められてきた。しかし、接続詞は、他品詞からの転成、あるいは固定的語連続としての句が独立したものであるから、成立的に用例が単位となる。しかも、ある語のある用例が一挙に接続詞性を獲得するわけではなく、徐々に接続詞化すると考えられる。転成にも独立にも程度があり、必ず中間的な段階があるはずだ。用例間の差を捨象して語のレベルで切取るなら、多重のニュアンスがこめられることになるだろう。現代語で接続詞と認定された語でも、多少とも元の性格を残存し、それがその語の各面での性格を段階的にし、全体としての性格を複雑にしている。個々の用例における機能の検討から出発することが、接続詞の場合は特に必要だ。今後の接続詞研究は、意味による分類を部分的に修正するよりも、各語について、どの点でどういう性格をどの程度もつ用例が、どういう範囲にわたって、どういう言語的環境の条件でどういう割合で得られるかを調査し、そういった下からの作業を通して、副詞<sup>1</sup>・陳述副詞や接続助詞およびそれに相当する一連の語連続<sup>2</sup>との関連を考慮しつつ、接続詞の性格を多角的→統合的に明らかにすることを緊要な課題とすべきだろう。本稿はその立場から、副詞・陳述副詞との境界付近に位置する語のうち同帰関係の一群を取上げた試論である。

『分類語彙表』の〔接続〕中、4.115 同帰の部分だけは、接続詞より副詞と

1 以下、特に断わらないかぎり、単に「副詞」と言えば、陳述副詞を除く一般の副詞、すなわち、情態副詞・程度副詞・時間副詞をさす。

2 …タトコロデニ…テモ、…ニモカカワラズニ…ノニ など

されることの多い語だ。『現代雑誌九十種の用語用字』の語彙表に収録された標本使用度数7以上の語について辞書での品詞認定の実態を表に示す。一般に品詞認定の差異は、よって立つ文法理論<sup>3</sup>そのものの違いのほか、品詞決定過程で、性格検定で段階を認めず二者択一に判断し、用例間の差を軽視して語として一括し、複数の品詞性を兼備していてもどれかに裁断するなど、数次にわたってニュアンスを切捨てる傾向とも関連する。接続詞と並んで「接続」として一括され、文法論でも特に文章論中の接続論で接続の機能を認められながら<sup>4</sup>、辞書ではふつう副詞とされるこれらの語には、そのようにして切捨てられた複雑な性格があるはずだ。副詞・陳述副詞・接続詞の典型とどこが同じでどこが違うのか、実例で調べてみよう。

	広	岩	潮	明	例	基	和
スナワチ	名 副	名副接	名副接	接	接	接	副
ツマリ	名 副	名 副	名 副	名 副	体	副	副
要スルニ	副	連(接)	副	副	句	一	副
タトエバ	副	副	副	副	副	副	副
イワバ	?	副	副	副	句	連	副
ショセン	名(副)	副	名 副	副	体(副)	一	副

広：広辞苑<第二版>（岩波書店）

岩：岩波国語辞典<第二版>（岩波書店）

潮：新潮国語辞典（新潮社）

明：新明解国語辞典（三省堂）

例：例解国語辞典（中教出版）

基：外国人のための基本語用例辞典（文化庁）

和：新和英大辞典（研究社）

3 語としての単位を認定する立場を含む。

4 市川孝「文章論」では接続語句にスナワチ・ツマリ・要スルニ・タトエバを、永野賢『文章論詳説』では接続語中の接続語のうち接続詞の例にスナワチ・ツマリ・タトエバを、森岡健二「文章展開と接続詞・感動詞」では補足の接続詞にスナワチ・ツマリを、それぞれあげている。

## 方 法

1 次に掲げる 35 の文献から副詞・陳述副詞・接続詞の性格<sup>6</sup>に関する情報を収集し、観点・言及面ごとに整理し要約して表形式にまとめた。

浅尾芳之助『文語文法』	市川孝「文章論」
井手至「接続詞とは何か」	井上誠之助「副詞と連体詞」
大岩正伸『文語文法概要』	岡村和江「副詞および連体詞の境界」
小田島哲哉「接続詞の解釈」	亀井孝『概説文語文法』
佐伯哲夫「接続詞の機能」	佐久間鼎『現代日本語法の研究』
佐治圭三「接続詞の分類」	佐藤喜代治<接続詞>
鈴木一彦<接続詞・陳述副詞・副詞>	鈴木重幸『日本語文法形態論』
塚原鉄雄「接続語」「接続詞」「接続詞 その機能の特殊性」	土井忠生『古典文法』
時枝誠記『日本文法口語編』	徳田浄『国語法査説』
永野賢『文章論詳説』	永山勇「接続詞の誕生」
芳賀綏『日本文法教室』	橋本四郎「接続助詞と接続詞」
松下大三郎『標準日本口語法』	三浦つとむ『認識と言語の理論第三部』
湊吉正「接続詞の境界」	森岡健二「文章展開と接続詞・感動詞」
山田孝雄『日本文法学概論』	渡辺実『国語構文論』『品詞論の諸問題』 <陳述副詞・副詞>

2 それをもとにして各品詞性を弁別する項目を選定し、それぞれについて選択肢<sup>7</sup>による設問の形式で検定調査票を作成した。

3 同帛に属する前掲の 6 語の実際の使用例を、国立国語研究所の「現代雑誌九十種」「文学作品・論説文・科学読み物」の用例カードから求め、現代小説 6 編から新たに採集した用例を加えた。

4 各語の各用例<sup>8</sup>について各項目の性格検定調査を実施した。

- 
- 5 性格または傾向であり、必ずしもその品詞の条件ではない。
  - 6 接続詞がもつとされる性格を前に配列した。
  - 7 漢字ではふつう則と表記される「接続助詞バ+（コレ+）スナワチ」の例は、他の一般の用法と連続的ではあるが、接続詞性を問題とする観点では逸脱しているので除外し、「コレヲ+要スルニ」の例も、成立的には連続するものの、ヲ格をうけている以上は動詞段階と判断して除外した。また、用例数の著しく多い場合は、時間の関係で、出典に偏向を生じない範囲で抽出した。検定を行なった用例の調査実数は、スナワチが108、ツマリが136、要スルニが54、タトエバが60、イワバも60、ショセンは25である。

品 詞 性 格 対 照 表

性格・傾向	副 詞	陳 述 副 詞	接 続 詞
単独で文節を構成	で き る (自 立 語)		
活 用 が	な い		
主 語 に	な れ な い		
修 飾	す る		し な い (先行表現に修飾格を付加)
	素材の意味を	陳述のしかたを	
	用言の述語だけを	用言の述語をも名詞+ダの述語をも	
対等な表現単位の 中間に立つ性格が	な い		あ る
述語の直前に	立 つ		立 た な い
	述語の直前が正常な位置	文頭が正常な位置	いくつかの成分を越える移行は困難
後項の意味的範囲は	文を最大とする		文を越えて段落に及びうる
承 前 機 能 が	な い (前項との関係を基本的にもたない)		先行の素材の意味を未分化の形で反復指示 (前項と後項との関係を限定)
対 立 項 を	つ く ら な い		(前後の表現に)つくる (同一レベルの文法的単位どうし)
素材的・実質的・ 名づける意味を	も つ		も た な い
	概念内容を表わす——詞		もっぱら陳述的な意味を表わす——辞
		話し手の気もち	先行表現と後続表現との関係づけ
誘 導 機 能 が	な い	あ る	
		述 語 誘 導	叙 述 誘 導
述 語 に	なりうる(～+ダ・デス)		な れ な い
文 において	連 用 成 分		独 立 成 分
被 修 飾 語 に	な り う る		な れ な い
係 助 詞 が	つ き う る		つ き え な い
省略して文の事実 関係が	変 わ る		変 わ ら な い
述語の陳述的意味 を表わす一定の形式と呼応	し な い	す る	し な い

- 5 各用例の検定結果を選択肢ごとに集計し、量的な出現傾向を推察した。
- 6 質的検討を加味し、語としての性格の判定を検定項ごとに段階表示した。
- 7 問題の語の品詞性を対比的に明らかにするため、副詞・陳述副詞・接続詞の代表語各4を取上げ、用例を想定して検討し、同様の手続きで検定項ごとの性格を段階的に判定し、表示した。

## 検 定

各検定項の設問文・出題意図・判断規準・結果・問題点を示し、解説する。

〔支〕 支配領域が——文より大 / 文 / 文より小

- 0 意味規定の関係にある後続表現の範囲を支配領域とすれば、それが文を越える明確さにも、支配の強さと関係の直接性で段階が生ずる。「すると彼女は目を輝かせた。体の底から燃えてくる愛に。」のように形式上2文でも文の一部が修辭的事項で取立てられた結果にすぎない場合が最も緊密で、「そしてついに皆勤を破った。起きていられなかったからだ。」のように従属節で1文に還元できる場合、「それでかぜをひいた。悪性の流感にかかった。」のように同意反復の場合、「それでも迷った。もどかしい迷いだった。」のように結局1事実に対応する場合、「敵は強い。そこで大勢で出かけることにした。武装することになった。」のように別々の事がらを述べている文にそれぞれ意味的に関係する場合、の順に支配がゆるくなると考えられる。ここではなるべく広く支配力を認める立場をとった。なお、先行文群をうけながら後続の支配で文を越えない場合は、用例の検定の段階では文以下の支配という現象を重視し、語としての判定を行なう質的検討の過程では能力をも考慮した。
- 1 スナワチ・ツマリ・タトエバは文を越えて支配の及ぶ場合がある。
  - 例1：きわめてニベもなくこれに应对した。すなわち同居までの事実は認める。しかし葦夫の主張は否認する。＜「週刊朝日」＞
  - 例2：井上光貞氏は『魏志』の再検討から論争に新しい手がかりをつかもうとする。つまり『魏志』に書かれている日本以外の国についての記事の内容や『魏志』自身がどんな立場で書かれたのか、その研究はほとんどされていない。その空白

を埋めることによって『倭人伝』の分析の新しい展開が期待される」というのである。＜「朝日新聞」

例3：夜も昼も、時間を本能的に知覚するふしぎな才能を代りにもってゐる。たとへば星が移る。その移行の精密な測定に長けてゐなくても、夜の大きな環がめぐり、昼の大きな環がめぐってゆくことは体でわかる。＜三島由紀夫「潮騒」

- 2 ツマリと似た性質の予想される要スルニには、漢字で表記する習慣もあずかって、要約という語源意識がツマリほど薄れていないために、以下が1文にまとめられる傾向と関連してか、文を越える例が現われにくい。しかし、文相当の単位にかかわる例の多い点で、文の成分を支配するにとどまる例がほとんどを占めるイワバ・ショセンと分かれる。

〔承〕 承前機能が—— ある / ない

- 0 バカと要約されるべき素材を含む先行表現が言語的に実在しない状況で「要するにバカなのだ」という発言が起こることもある。この場合でも、思考レベルでの要約の働きがないとは言えない。典型的な接続詞でも「しかしえらいことをしてかしたものだ」などは同類だ。このように前をうけているかないかは微妙なので、ここでは、文章の冒頭に立つことができるかどうかを規準とした。それが可能なら先行思想を予想せずに成立し、不能なら何らかの意味で先行部に依存すると考えられるからである。

- 1 スナワチ・ツマリは少数の疑問例を除いて先行表現の何らかの意味をうけて後続表現にかかわり、その働きが全くないと断言できる例は見あたらない。

例4：それは息づまるような混乱した緊張感であり、私があえてそう呼ぶのを欲しない一つの情念に似ていた。すなわち恐怖である。＜大岡昇平「俘虜記」

例5：老朽教師といいますが、つまり年をとって教育能力を失ったと認定されるような先生ですよ。＜石川達三「人間の壁」

- 2 要スルニ・タトエバも大部分は前をうける関係が認められるが、うけるべ

---

8 その語の基本的な用法を意識しすぎて、用例における承前機能を実際以上に認める方向に駆立てられる面もあるかもしれない。

9 この意味での承前機能は、「やはり」「現に」のような副詞、指示機能をもつ代名詞・連体詞、「同所」「翌日」のような名詞にも共通する。

き言語事実が先行部に存在しない次のような例もある。

例6：一人の人が完全に自由になることも要するに理想にすぎない<阿部次郎「人格主義」

例7：青年はべつにヤミ物資のボスではなく、たんなる売子にすぎなかったので、歩合の収入は、要するに足まめであるかどうかにかかっていた。<藤森栄一「旧石器の狩人」

例8：詳細は例えば『量子力学序説』を参照されたい。<湯川秀樹「物質世界の客観性について」

3 イワバ・ショセンは逆に少数の疑問例を除いて先行表現をうけていない。

例9：人体の骨組みを露出さしたやうな手術台は、いはば女性を辱かしめる想念の形骸である<井伏鱒二「本日休診」

例10：腕力にかけては所詮彼三次郎君に勝つ見込がない<徳富健次郎「思出の記」

4 ショセンが詮ずる所という語源的な意味を強く残し、現在の優勢な用法と違って必ずしも否定的陳述と呼応しない場合は微妙である。

例11：人間現象の姿を、むしろ現象界で確捕出来ず、所詮自然悠久の姿に於て見ようとする激しい意欲<岡本かの子「河明り」

〔対〕 

先行表現・後続表現に対等の関係に立つ部分を――	もつ	／	もたない
-------------------------	----	---	------

0 接続詞はAおよびBやAしかしBのように対等なA項とB項との関係に対する認識を明示するが、典型的な副詞・陳述副詞は前後の表現にそのような対立項が認められない。完全な場合にはA～B=B～Aとなり、かつ両者に形式上の一致が見られるが、ここでは同格という観点に規準を下げた。

1 スナワチ・ツマリは例12～13のようにだいたい対立項をもつが、例14～15のようにその種の2項の認められない場合もある。

例12：色の3属性が考えられる。即ち色相・色あい・色みともいう。<「美術手帳」

例13：私の左手は、幼時から第一歩を踏み出す習慣になってゐる足、つまり右足の足首を握る。<大岡昇平「野火」

例14：そのことが、即ち、雄平と有紀の一生に影響を及ぼす<「サンデー毎日」

例15：自分は一生結局之と云ふ何の仕事もせず<長与善郎「青銅の基督」

2 要スルニは例16のようにもつ場合より例17のようにもたない場合が多い。

例16：当為というは要するにこの超個人的純粹意志の要求だ<出隆「哲学以前」

例17：愛の暴力にせよ、執念の爆発にせよ、要するに、彼女の趣味から遠く<獅子文



## 六「自由学校」

- 3 ショセンは対等な2項をそなえた例が見あたらない。

例18：行ってみる間は何か心が燃えながら、行ってみるとどこかと淋しくなる気持ちはどうした事だろう。所詰、私と云う女はあまのじゃくかも知れないのだ。＜林美美子「放浪記」＞

- 4 タトエバ・イワバも疑問例はあるが基本的に対立項をもたない。

例19：イギリスの経済学は、例えばカルドーに代表されるように、個々の経済現象の間の関係を求めるのがその仕事であった。＜笠信太郎「ものの見方について」＞

例20：自分の気持を露骨に出して書く癖なので、いつも病気のことが出てきて、謂はば辛気くさい作品しか出来ない。＜「新潮」＞

〔中〕 対立する二つの表現単位の間—— 立つ / 立ちうる / 立たない

- 0 対立項の中間に位置する接続詞は接続助詞<sup>10</sup>や並立助詞<sup>11</sup>に置換できる。

- 1 スナワチ・ツマリはふつう例21～22のようにその中間に位置するが、ツマリには例23のようにその性格をもたない例も少なくない。

例21：もっと本質的なもの即ち表現の過剰＜「俳句」＞

例22：すでに道化の上手になっていました。つまり、自分は、いつのまにやら、一言もほんとうのことを言わない子になっていたのです。＜太宰治「人間失格」＞

例23：これはきっと、広介がこの頃のように家で仕事を始めたからだと思うの。以前はつまり、文筆の仕事をするのは、私が主だった＜佐多稲子「くれない」＞

- 2 要スルニはその性格をもたない例のほうがむしろ多い。

例24：体あたりをして還って来た奴はいないから、要するに水掛論だ。＜阿川弘之「雲の墓標」＞

- 3 ショセンは中間位置の性格がほとんど認められない。

例25：エロ映画として製作され、しょせん、陽のあたる場所に出られない“映画界の隠し子”もある。＜「週刊新潮」＞

- 4 タトエバ・イワバもほぼ同様に、次のような例がふつうだが疑問例もある。

例26：金利が低下してくるということになれば、たとえば日本銀行から金を借りるよ

---

10 「雨が降り出した。それで運動会は中止になった。」→「雨が降り出したので運動会は中止になった。」

11 「春および秋」→「春と秋」 「東あるいは南」→「東か南」

りもく「実業之日本」

例27：北海道は全国の人が移住していったのであるから、いわば、寄り合い世帯である。＜「日本週報」

〔頭〕 文頭—— にある / のほうが自然 / にも置ける / には置けない

- 0 並立の接続詞は文頭に立たない<sup>12</sup>し、逆に典型的な副詞でも文頭にくる場合があるが、文間の接続詞より文頭位置の割合ははるかに少ないと予想される。文頭が述語の直前にあっても機械的に操作したので、ここでの着眼点は、文頭に位置しているか文頭のほうが自然な例がどの程度の割合を占めるかにある。

- 1 スナワチ・ツマリ・要スルニ・タトエバは文頭の例がかなり見られる。

例28：即ち引き上げた目は地糸になります。＜「婦人倶楽部」

例29：つまり血なまぐささの中で仕事をしようとしてるんだろう。＜武田泰淳「風媒花」

例30：要するにタンニンを出さないようにすればいいのです。＜「婦人画報」

例31：例えば、胃カイヨウの手術を例にとってみますと＜「週刊読売」

- 2 イワバは例32のように文頭に移せない場合が多いが、例33のように文頭に位置している場合もまれではない。

例32：小学校にはいったばかりぐらいの、いわば、赤ン坊に毛の生えた程度のシロモノ＜「主婦と生活」

例33：いわば直線的な眉であるが、これは男性に多い。＜小説サロン」

- 3 ショセンはほとんどが例34のように文中に現われるが、例35のように文頭に立った例も全くないわけではない。

例34：会社の休業も所詮やむを得ない＜「ジュリスト」

例35：しょせん、実用はおしゃれに敵わぬということであろうか。＜「婦人朝日」

〔直〕 述語の直前—— には置けない / にも置ける / のほうが自然 / にある

- 0 接続詞は、いくつかの成分を越えて述語の直前に位置させることが、副詞・陳述副詞に比べて、著しく困難である。

- 1 タトエバは文意を変えずに述語の直前まで移行させることができない。

---

12 位置を絶対に動かせない点で副詞と明確に区別される。

例36：たとえば稽古事にしても花から喧しく言わずとも自分から励んでいた。＜有吉 佐和子「紀ノ川」＞

2 スナワチ・ツマリ・要スルニ・イワバもその傾向が強い。

例37：すなわち日本ではあまり多くのことが好悪に支配されすぎる。＜武谷三男「革命期における思惟の基準」＞

例38：終戦の年の十月、つまり今から約一年前、岡部は南方から復員してきた。＜井上靖「闘牛」＞

例39：要するに利巧なのが勝ちさ。＜「実話雑誌」＞

例40：ヴァニティはいはばその実体に従って考へると虚無である。＜三木清「人生論ノート」＞

3 ショセンは例41のように移行しにくい場合も、例42のように移行できる場合も、例43のように事実そこに位置する場合もある。これは順に、支配領域の縮小の反映であり、接続詞性が副詞性にとって代わられる段階に対応すると考えられる。漢字表記からカナ表記への移行とも相関がありそうだ。

例41：所詮己は牛にふみつぶされる道傍の虫けらの如きものに過ぎなかったのだ。

＜中島敦「李陵」＞

例42：唯「面白い」と云ふ丈けにすぎぬ芸術は所詮二流以上のものではありません  
＜長与善郎「青銅の基督」＞

例43：純粹に客観的になることなど、しょせんできないことなのである。＜小尾信弥「宇宙の謎はどこまで解けたか」＞

[修] 

修飾機能が――	ない	/	ある
---------	----	---	----

0 副詞が用言の述語だけを修飾するのに対し、陳述副詞は用言の述語をも体言＋ダの述語をも修飾するとされるが、陳述副詞のように述語全体ではなくいわゆる辞の部分だけにかかって陳述部を限定する働きは修飾と区別した。したがって、ここでは、述語の詞的な意味を説明してくわしくする働きがあるかどうかに限って調べた。

1 ショセン以外はこの意味での修飾語として働かないと考えられる。

例44：すなわち原子力これである。＜渡辺慈「原子党宣言」＞

例45：つまりどんな時代が来ても、絶対安全な人だから、君の方にもいゝでせう。  
＜大仏次郎「帰郷」＞

例46：かれらは要するに貧しかった。＜中野重治「むらぎも」

例47：例へば心の美しさでもいったやうなことなのか。＜「文芸」

例48：いわば評論家の立場から種々の発言を重ねてきた。＜「世界」

- 2 ショセンも例49のように修飾機能をもたないのがふつうだが、結局のところという意味が薄れ、承前機能も鈍り、否定の陳述と呼応して、とうていの意味を帯びるにつれて陳述副詞的になり、全然の意味にほとんどなりかかった段階では、例50のように、情態を表わす語の属性を限定する程度副詞の詞的性格を兼ねた陳述副詞<sup>13</sup>と区別しがたい。

例49：しょせん、それが正義にもとる国際条約違反であることを＜「日本週報」

例50：出場牛の全部を買ひとってしまふなどといふ事は所詮適はぬ大それた望みなのだ。＜井上靖「闘牛」

〔独〕 

独立	／	連用	——	成分
----	---	----	----	----

- 0 特定の述語にかかるものだけを連用成分とし、従属節を代行するもの、並立関係の成分<sup>14</sup>間に位置するもの、文・節の全体にかかるもの<sup>15</sup>は、特定の述語にかからないという意味で非連用成分として一括し、独立成分で代表させた。

- 1 スナワチ・ツマリ・タトエバ・イワバは連用成分にならない。  
2 要スルニにも確かに連用成分と思われる例はほとんど見られない。  
3 ショセンも傾向は同じだが、例51のような微妙な例が散見し、例52のようにむしろ連用的に近い例<sup>16</sup>も見いだされる。

例51：しかし、所詮、むだな抵抗だった。＜「小説倶楽部」

例52：若し僕に馬遷の筆あらば此一種風かはりの鴻門の会を描くのだが、所詮出来ぬとして＜徳富健次郎「思出の記」

〔述〕 

ダ・デスをそえて述語と——	なりえない	／	なりうる
---------------	-------	---	------

---

13 カナラズ・チットモ など

14 語・句・節・文

15 結局は、それぞれの末尾の陳述部にかかる、と考えられる。

16 例51と例52とに端的に現われているように、その語の直後に読点があるかどうかが接統詞性・副詞性の度合に傾向として対応すると予想される。

0 大部分の情態副詞<sup>17</sup>や多くの程度副詞<sup>18</sup>がもち、ほとんどの陳述副詞<sup>19</sup>がもたず、接続詞がもたない体言的な性格の一つについての検討である。

1 6語のどの用例も基本的にこのような性格をもたないが、例8について「その本に限るか」の質問をうけ「一例にすぎない」という気もちで「たとえば（ということ）です」と答えることも起こりそうで、「一例です」を述語とするなら、省略的・間投的なこの「たとえばです」も微妙である。

〔被〕 被修飾語に—— なりえない / なりうる / なっている

0 情態副詞は程度副詞に修飾される場合があり<sup>20</sup>、程度副詞も他の程度副詞に修飾される場合がありうる<sup>21</sup>が、陳述副詞と接続詞にはその性格がない。

1 6語とも、修飾語をとった例が見あたらず、被修飾語となる場合を想定することもできない。

〔係〕 係助詞が—— つきえない / つきうる / ついている

0 陳述副詞でも係助詞を伴う場合<sup>22</sup>が絶対にはないとは言えないが、少なくとも、典型的な情態副詞のようにいろいろな係助詞と自由に結びつく<sup>23</sup>ことはない。

1 ツマリハ・ショセンハを別にすれば<sup>24</sup>、6語とも係助詞を伴わない。

---

17 ビッシヨリ・イヨイヨ など（ギャギャ・シッカリなどは実現困難）

18 チョット・ワズカ など（ゴクは疑問）

19 ゼヒ・タトイ など（タブン・キットは例外的）

20 「今度の旅行はずいぶんゆっくりでしたね」など

21 「もつともつとほしい」は反復強調だとしても、「もつとずっとゆっくり読みなさい」では、順序を逆にして「ずっともつと」にできないから、モットとズットがそれぞれユックリにかかっているとは考えにくい。「もう少し食べたい」も類似の例であるが、このように順序が固定していることは、情態と程度との連続性を思わせ、前にくるものほど程度性が強く、後にくるものほど情態的だと考えられる。

22 たとえば、モシモ（ただし、「もしもの時」のように格助詞を従え、モシモ全体で名詞の機能を果たすこともあるので、モシとモとが別々の働きを分有しているとは、もはや言えないだろう）

23 ハッキリはハ・モ・サエ・コソなどをそえることができる。

24 ツマリハ・ショセンハをモシモと同様に全体で1語と考えるなら

2 ハを伴ったツマリハ・ショセンハは用法の上でツマリ・ショセンと微妙な差が認められる。概して言えば、前者は後者の意味の一部を受持ち、それを強調するが、はみ出る部分もある。ツマリハとツマリとの場合は、例53のような結局の意のツマリハはツマリと交換可能、例54のような累加の最終段階を示すツマリハはツマリとの交換不適、例55のようにスナワチの代表的な用法<sup>25</sup>に対応するツマリは逆にツマリハとの交換不能という関係が推定される。ショセンハとショセンとの場合は、例56のような結局はの意のショセンハはショセンと交換可能、例57のように本質的にの意なら、否定陳述と呼応しないショセンハのほうが適切、例58のように最終的にというよりもむしろ初めから全くの意なら逆にショセンのほうが適切<sup>26</sup>という関係になるだろう。

例53：そこがつまりは主人の豪いと云ふ理由になる<横光利一「機械」

例54：土も流れる、檻樓も出る、つまりは元の無に還りますでなく徳富健次郎「思出の記」

例55：数字が2の場合、それが「目」の下にはいりはじめたとき、つまり Q<sub>1</sub> という時点ではく坂井利之「文字を読む機械」

例56：恋女房の泪も、おふくろの繰言も、所詮は何の廣すところもなかった<久保田万太郎「末枯」

例57：軽部が私への反感も所詮は此の主人を守らうとする軽部の善良な心の部分の働きからであったのだ。<横光利一「機械」

例58：英文学をカじる奥さんと、配給所のオッサンとでは、所詮ムリな取組みである。<獅子文六「自由学校」

[省] 省略したときに文意が—— 変わらない / 変わる

0 「一つ食べた」と「もう一つ食べた」とは事実関係が違うが、「絵のようだ」と「まるで絵のようだ」とには実質的な文意の差はない。「愛した。しかし別れた」と「愛した。だから別れた」とも事がら的には同じだ。「雨および雪」を「雨雪」にすると不自然になるが、「雨と雪」でも「雨・雪」で

25 「そっくりそのまま」の意で、いわば＝の用法。要スルニで置換不能。

26 ショセンハに変えると、トウテイという感じが薄れる。

も並立関係は成立する<sup>27</sup>ので、この場合のオヨビに相当するものも同意で省略可と判断した。

- 1 スナワチ・ツマリ・要スルニは省略しても文意の事実関係に影響しない。

例59：一国の人民は即ち政府なり。＜「朝日新聞」

例60：あの姿が、つまり今の己なのだ。＜中島敦「李陵」

例61：姉の冷やかかしは要するに余計なおせっかいであった。＜野上弥生子「真知子」

- 2 スナワチには同格の名詞の間に位置する場合がツマリ・要スルニより多く、省略した結果が不自然になる割合がそれだけ多い。

例62：目撃者すなわち共犯者＜武田泰淳「風媒花」

- 3 タトエバ・イワバ・ショセンも傾向としては同じだが、省略が実質的な意味に微妙な影響を与える場合がある。例63でタトエバを省略すると、仮定の例が実例に変わりやすく、例64では読点の前と後とが同一対象についての形容の並列で同意反復のはずなのに、イワバを省略すると、同格ではなく、前部が後部のけものに修飾的にかかる確率が著しく増し、例58でショセンを省略するとむりの度合が減る<sup>28</sup>など、文意の詞的な面の変化にもつながる。

例63：たとえばある日、道で一人の農夫に出会った。＜「知性」

例64：考える力を喪失した、いわば動物園の檻のけもののようであった。＜梅崎春生「桜島」

〔呼〕 

呼応現象が――起こらない	／	起こりうる <sup>29</sup>	／	起こっている
--------------	---	---------------------	---	--------

- 0 ここでの呼応は、陳述副詞に見られる述語の陳述部を限定する現象<sup>30</sup>をさす。

- 1 6語のうちではショセンが最も述語に対する拘束力が強く、否定の陳述<sup>31</sup>との呼応が広く認められるが、例57のように語源的な意味をかなり残してい

27 中間に立つ語の働きに依存しないと考えられる。

28 この意味では程度副詞的と言える。

29 「多分来るだろう」が単に「多分来る」として現われたような場合で、動作の主体が話し手自身であるためにダロウなどが実現しない場合を含む。

30 ケッシテ…ナイ、マサカ…マイ、モン…ナラ、ゼヒ…タイ など

31 ない（ナイ・…ナイ・アリエナイ・ニスギナイ・ハズガナイ・ヤムヲエナイ）・ぬ（デキヌ・カナワヌ）など

る場合には、スナワチ・ツマリ・要スルニのグループに近く、肯定の DEAL との呼応も見られる。広く共起現象として見れば、例51の「むだ」や例58の「ムリ」のような否定的意味の語、例49の「国際条約違反」や例65～69のようなマイナス評価の語との共存傾向<sup>32</sup>があるが、この現象もそれらの語についての話し手の陳述的な面に対する広義の呼応と考えることができるだろう。

例65：花魁此糸とて、所詮は浮川竹の流れの身の上。＜「文芸」

例66：しかし所詮は、捨てた刀の道である。＜「面白倶楽部」

例67：しょせんは世に汚れた私でいます。＜林芙美子「放浪記」

例68：だけど所詮はどこへ行っても淋しい一人身なり。＜林芙美子「放浪記」

例69：大きな野心をもってみたところで、所詮は小学校の教師だ。＜石川達三「人間の壁」

- 2 スナワチ・ツマリ・要スルニは肯定の断定<sup>33</sup>と呼応する点でグループをなす。

例70：甲丙の間に立つのが乙党即ち漸進党である。＜徳富健次郎「思出の記」

例71：一緒だというのは、つまり連れて行ってもらおうのである。＜小林秀雄「私の人生観」

例72：要するに君は何を言いたいんだ。＜石川達三「人間の壁」

- 3 スナワチは単なるダ系が比較的多い点と理由を示すナノダ系・ワケダ系に現われにくい点に、ツマリはその肯定断定形式のどの系統にも現われる点とノダ系の特に多い点に、要スルニは同格のダ系の特に多い点と理由のカラダ系に現われにくい点に、それぞれの対比的特徴がある。

- 4 タトエバは仮定を伴った言語形式<sup>34</sup>や例示・取立てに関する語<sup>35</sup>と、イワバは比況・類似にかかわる言語形式<sup>36</sup>と共存する傾向が見られるが、狭義の

---

32 この場合は、ショセンよりショセンハとなりやすい。

33 だ・である・です・なり——{(トイウ)(コト・モノ・ワケ・カラ)(ナ)ノ}(ダ・デアル・デス)の形で現われやすい。

34 トスル・トシテハ・ニシテモ・ニシタトコロガ など

35 ノヨウ・トイウ・ナド など

36 助動詞(ヨウ・ミタイ)、接辞(…メク)、造語成分(…流・…的・…程度・…待遇)など



呼応を明確に認めることは、どちらの場合も困難である。

## 判 定

- 0 表の左側は語としての性格を項目ごとに用例の検定結果から推測して5段階に判定したものである。段階は次に示すように等間隔ではないが、今回扱った実例と想定例から導かれるその性格の強さの順に対応する。

- その性格をはっきりともつ
- その性格が傾向として認められるが疑問な場合もある
- △ その性格をもつ場合ともたない場合とがある<sup>37</sup>
- その性格が基本的に認められないが疑問な場合もある
- その性格をもたない

- 1 主情報：語を固定して項を追えば、どの語（すなわち・つまり……）が、どの品詞（副・陳・接）としての性格を、どの点（検定項目〔支〕〔承〕……）で、どの程度（○～●）そなえているかがわかる。
- 2 副情報：項を固定して語を追えば、どの点で、どの品詞としての性格を、どの語が、どの程度そなえているかがわかる。

## 対 比

- 0 表の右側は、各品詞に属する代表的な語<sup>38</sup>を取り上げ、想定できる用例について、同様に各項目の検定を行ない、その判定を段階表示した結果である。これによると、同帰の6語に比べれば、それぞれの品詞の性格を他品詞の性格より明確にもっているが、このような典型的な語でも、その品詞がもつとされる性格のすべてを完全にそなえ、他品詞の性格を全くもたないというわけではない。特に副詞は、情態副詞はともかく、時間副詞も程度副詞も陳述副詞性を分離できないし、逆に陳述副詞も、ソ系代名詞・形式動詞を語

---

37 はっきりとした傾向が認められない場合で、必ずしも両方の性格を半分ずつそなえているという意味ではない。

38 文法関係の文献にその品詞の例としてあげられる語で、副詞は、情態副詞・程度副詞・時間副詞のそれぞれから選び出した。



構成要素にもつ接続詞<sup>39</sup> もそうであるように、詞的な意味を含まないとは言えない。

- 1 カナリに係助詞がつきうると言っても、「勝てないまでもかなりはいけそうだ」などがせいぜいで、いろいろな係助詞と自由に結びつくことはない。
- 2 「会はまだ開かれない」は、会がやがて開かれるという前提（辞的）を潜在情報（詞的）としている点で、「会が開かれない」と違うが、「彼はまだ子どもだ」の場合は、単に「彼は子どもだ」と言うのと実質的に同じで、ただその事実に対する話し手のとらえ方（辞的）に差があるだけである。どちらのマダも断定の陳述<sup>40</sup>と呼応し、ともに、継続中<sup>41</sup>の動作・状態が話し手の想定する到達点<sup>42</sup>の手前<sup>43</sup>の段階にあるというマダの基本的意味を有しながら、前者のほうが詞的要素の残存が強く、後者のほうが陳述副詞側に寄っている、という用法上の差も無視できない。
- 3 「地震があった。まもなく津波が起こった」のように、現在点ではなく先行文の時が規準になっている場合のマモナクは、先行表現に依拠してその語意が充足する関係にある。また、「もうまもなく」のように被修飾語になりうる点は副詞的だが、「まもなく試合だ」のように体言+ダの述語にかかる点は陳述副詞的である。「まもなく彼も弱音をはく」のマモナクが文にかか

---

39 ソレデ・ソレカラ、スルト・ソウシテ など（ソシテ・シカシは化石的）

40 否定と肯定との違いはあっても

41 否定形式も未到達状態の継続と考えることができる。

42 「会はまだ開かれない」では開会時が、「彼はまだ子どもだ」では成人に達した時点が基準である。「論文をまだ書いている」と「論文をまだ書いていない」とは完成時を到達点に設定して依然その手前にとどまっていることを示す意味で共通する。破壊過程では「まだ家だ」、建設過程では「まだ家でない」となり、その逆にはならないが、両者は想定している到達点が違う。また、「まだたくさんある」も、なくなる時点を、「このほうがまだましだ」も、最低の段階を、それぞれの到達点と考えれば、それへの途次にあるということで一元的に説明がつく。

43 肯定形式もこの意味では否定的な要素が潜在する。「まだ子どもだ」は「まだおとなになっていない」という意識の上に立っていると考えられ、「まだおとなだ」という言い方が成り立たないのは、手前というとらえ方ができないためだろう。「まだ大学生だ」は成立するが、「まだ卒業生だ」は、同様の理由で成立しない。

るか述語だけにかかるかの判断は、発話の重点によってどちらも起こりうる<sup>44</sup>だけに容易ではなく、それに伴ってその位置も、主語の前と述語の直前とどちらが自然かを決定するのが困難になる。係助詞を伴う場合が想定できるのは、そのうちには必ずという気持ちで「まもなくは<sup>45</sup> むりでもいつかきつと再起する」のような例ぐらいだが、この言い方の成立する可能性には地域差がありそうだ<sup>46</sup>。

- 4 陳述副詞ケッシテも、「けっしてもうしません」より「もうけっしてしません」のほうが自然だとすれば、その位置的要求の点では、陳述副詞よりむしろ副詞的な場合があることになる。
- 5 「彼女はしかし泣かなかった」のシカシは、ある文脈では、ソレデモ<sup>47</sup>に置換でき、それはさらにナオ<sup>48</sup>で代用できると考えると、シカシという典型的な接続詞（辞）さえ副詞（詞）と非連続ではないことになる。そしてそのことが、前例のシカシが、日本語の性格上の原則を破って先行の「彼女は」の部分をも支配しているのかどうかをあいまいにする。そもそも接続詞の語

---

44 モが「もまた」の意なら、「彼が弱音をはいく」ことがマモナク起こるという関係で、このマモナクは以下の文全体を支配すると考えられるが、モが「さえも」の意なら、彼を話題にしており、マモナクは「弱音をはいく」という述語だけにかかるとしたほうが自然だろう。ただし、この二つのモも本質的には連続的で、「小結も関脇も、そして横綱も土がつく大荒れの初日」のように関連語系列の極に立つ名詞の後では微妙だ。これは一次的にはやはり並列であり、そこに並べられた名詞間の意味的關係から二次的に取り立て＝強調のニュアンスを帯びると考えるべきだろう。そのニュアンスが、大関をとび越えることによって強まり、順序を変えて「小結も横綱も関脇も」とすれば消えてしまうのは、そのように名詞の語彙的な意味にささえられて実現するからではなかろうか。

45 語としての取立ては普遍的に名詞だから別だが、その区別の判然としない場合がある。相手の発言または自分のそれまでの発言中の語であればかなり確実だとしても、それを引取ったのかどうかは話し手の意識にかかるので、正確な判断はむずかしい。

46 「まだはむり」の成立はもっと非東京語的か。

47 ソレの部分で先行表現の実質的な内容をうける場合は特に詞的である。

48 接続詞のナオではなく、「なおかつ」の意の副詞のナオ

順を完全に修辭的な問題とするのは疑問であり<sup>49</sup>、この場合のシカシは、少なくとも接続詞の典型的な用法に比べて、副詞側に一步寄った例と言えるだろう。

- 6 接続詞でも、ソコデはダカラなどと同様に、係助詞コソをとりうる<sup>50</sup>。
- 7 トコロデは文章の冒頭に立てないという意味で確かに前と何らかの関係をもつが、承前機能と言うより、逆にその間の関係を断ち切る形で前と関係するのである。シカシやソコデと違って必ず文頭に立つ<sup>51</sup>のは、シカシは主語の後に動かすこともできるが類意のガ<sup>52</sup>は移行不能のように、その語の成立事情の残照にもよるが、トコロデには先行表現の内容をうけて後続表現に意味的に関係する本来の接続機能がむしろないことにも関連するかもしれない。したがって、その前後の表現単位が対等な関係にあると言うときも、従属節を代行する他の接続詞とはかなり異質な意味において可能なのである。

## 結 論

- 0 同帰に属する6語に共通するのは、典型的な副詞との共通点をあまりもたず、程度の差はあれ接続詞との共通点を必ずもっていることである。
- 1 スナワチ・ツマリは、呼応の傾向が認められる点を除き、接続詞の性格をほぼそなえているが、〔支〕～〔直〕という接続詞にとってかなり重要な点で、十分にその性格をもっているとは言えない。しかし、これらを陳述副詞

---

49 however のシカシと決めつけて、この種のシカシを however のほうの機能で説明するのは、両者が厳密に対応するかどうかが不明なので、危険である。

50 先行表現の詞的内容との明確な対応をもつソコデ・ダカラと接続詞として独立したソコデ・ダカラとの間は連続的だから、コソがつく一事をもってその用例の接続詞性を否定し去ることはできない。事がらにかぎらず、その間の関係を取立てて強調することも可能だからである。

51 くだけた会話で「彼はところであれからどうした」などと言うこともありそうだが、あらたまった発言や書きことばではこのような語順では現われにくい。やはり文頭が正常な位置だという意識があるためだろう。

52 「が、しかし」が「しかし、が」とは絶対にならないのは、ガが接続助詞起源であることに関連するが、ともかくこのような併用が可能なことは、両者の意味・用法の上に何らかの違いのあることを暗示する。

として見れば、〔支〕～〔中〕の点であまりにも接続詞的である。

- 2 要スルニも、傾向としてはスナワチ・ツマリに準ずるが、その重要な点における接続詞的性格がそれらよりさらに弱い。
- 3 タトエバは、〔支〕〔承〕〔呼〕で陳述副詞の性格をあまりもたず、〔対〕〔中〕で接続詞の性格をほとんどもたないが、それぞれに共通する性格もいろいろな点でかなり見られる。
- 4 イワバは、〔支〕〔頭〕〔呼〕で陳述副詞の性格をほとんどもたず、〔支〕～〔中〕という接続詞にとって重要な点で、接続詞的性格がほとんど認められない。
- 5 ショセンも、〔呼〕で逆に陳述副詞的な点を除き、イワバと似た性格をもつ。

## 要 約

副詞・陳述副詞・接続詞がこの順に直線上に位置すると考えれば、同帰に属する6語のうち、スナワチ・ツマリは接続詞寄り、要スルニもやや接続詞寄り、タトエバは接続詞と陳述副詞との中間、イワバ・ショセンはやや陳述副詞寄りの性格であり、副詞側に大きく近づいた語は認めがたい。

〔付記〕 本稿では、同帰の6語の品詞性を問題にした。それらの語の意味・用法の詳細、およびその異同・関連については、稿をあらためて論じたい。